保育専門職としての意識を高める児童館実習の学び

― 保育士養成課程における保育実習Ⅲの位置づけから―

Learning from Practical Training in Children's Center to Enhance Consciousness of Childcare Professional
― Characterization of Childcare Practical Training Ⅲ in Childcare Worker Training Course ―

森　　知　子*

Abstract

An object of this paper is to consider the meaning of a practical training in a children's center in a childcare professional training course. Childcare workers have been required to cooperate with families and communities in their society. Generally, kindergartens and nursery schools are much expected to support child-raising families in the community. This study focuses on a children's center which also develops community-based child support activities. To confirm the importance of the children's center, a questionnaire survey was carried out to the students in childcare training schools. The survey found what the students had leant from the practical training in the children's center.

The students who attended the practical training in the children's center enhance their consciousness as the childcare professional in the following points: (1) the support for parents and child-raising families, (2) the cooperation with the community, and (3) the need for the practice of childcare

キーワード：保育専門職の養成、保育実習、児童館

Ⅰ．はじめに

保育士養成において、保育実習は学生の専門的成長に大きく寄与するものであり、実習に関する研究の発展は保育士養成の中心的な課題の一つであると考えられている[1)]。特に、保育士資格が2001年（平成13年）に名称独占資格として法定化されたことにより、保育士の専門性を高める養成教育のあり方として、理論と実践を統合させる保育実習の場は、各養成校におけるカリキュラムの柱ともなっているといえる。全国保育士養成協議会専門委員会によってまとめられた「保育実習指導のミニマムスタンダード」には、「学術研究の多様な分野において、実習研究は独立した対象領域としての概念と固有の専門的文化を構成しており、保育実習指導の科学化と理論化を志向する興味深い立場と方法論が提示・展開されている。」[2)]と述べられており、保育士養成における実習研究への期待とそのあり方が示されている。

保育者養成実習[3)]に関する研究としては、保育所実習、幼稚園実習に関する研究が主体であり、各養成校の実践報告としてまとめられているものが顕著であるが、児童館実習に関する研究は見受けられない。児童館は、保育実習科目の中の選択必修科目の対象施設であり、保育士資格を取得するものが必ずしも実施するわけではないが、児童館が地域に果たす役割を考えた時、保育者を目指す学生にとって児童館での実習意義は大きく、保育専門職としての意識を高める貴重な機会となるといえる。本稿では、保育士養成課程に体系化された児童館での実習を取り上げ、その意義をまとめていきたい。

児童館は、保育士養成課程に体系化されている保育実習Ⅲの対象施設であり、保育実習Ⅱと並列科目

* Tomoko MORI　聖和短期大学
本稿の内容は、日本保育学会第64回大会（2011年５月）にて発表したものを加筆・修正したものである。

1）全国保育士養成協議会編　2007　保育実習指導のミニマムスタンダード―現場と養成校が協働して保育士を育てる―　北大路書房　p. 2
2）前掲1）p. 2
3）本稿では、幼稚園教諭、保育士を総称して保育者という名称を用い、保育士資格取得に必要な保育実習と幼稚園教諭免許状取得に必要な教育実習を総称して保育者養成実習という名称を用いる。

としての選択必修科目の位置づけにある。表１に示されるように、保育士資格取得のために必要な保育実習は、必修科目としての保育実習Ⅰ４単位（保育所実習２単位と保育所以外の施設実習２単位）に加えて、保育実習Ⅱ（保育所実習２単位）・保育実習Ⅲ（保育所以外の施設実習２単位）のいずれか一方を必ず選んで修得することになっている。保育実習Ⅱが保育所という同一種の施設での実習であることに対し、保育実習Ⅲでは、児童厚生施設をはじめ他の社会福祉施設諸法令に基づき設置されている施設での実習が含まれ、その実習施設の種別は広範囲にわたっている[4)]。厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知（雇児発0722第５号）の別紙３「教科目の教授内容」に示されている「保育実習Ⅲ」の目標に照らし合わせて考えると、保育実習Ⅲにおいて学生が学ぶ事項として、保育所以外の児童福祉施設の役割や機能についての理解を深めるとともに、保育実習Ⅰ・Ⅱより更に深化して家庭・地域社会との連携の方法を学び、保護者支援、家庭支援のための知識、技術、判断力を養うことが求められている。

平成20年の改訂「幼稚園教育要領」、改定「保育所保育指針」においては、子どもの生活や子育て家庭の環境が変化する中で、子育て家庭を支える地域の担い手としての幼稚園・保育所への期待が高まっていることが読み取れるが、幼稚園・保育所と同様に、児童館においても地域に根ざした様々な子育て支援活動が展開されている。児童館は、児童福祉法第40条に規定される児童厚生施設の一つで、児童に健全な遊びを与えて、その健康を増進し、又は情操を豊かにすることを目的としており、主な活動としては、①子どもの健全育成、②子育て家庭支援、③地域福祉促進の諸活動などがあげられる。地域によって、児童館の位置づけは様々であり、施設の規模や職員数などには特性がみられるが、一貫して、地域の子どもの健全育成の拠点としての活動が展開されてきた。近年では、放課後児童クラブ（学童保育）や子育て支援、中高生の居場所づくり等、地域に根差した多様な取り組みが進められている。田爪・冨田（2010）は、児童館の健全育成、発達支援の機能について検討する中で、子どもの遊びの充実や子育て支援に関わる専門的人材として、保育士養成の視点から児童館の価値機能を検討する有効性を述べている[5)]。

表１．保育実習実施基準　履修の方法

実習種別	履修方法		実習施設
	単位数	施設におけるおおむねの実習日数	
保育実習Ⅰ（必修科目）	４単位*1	20日	（A）
保育実習Ⅱ（選択必修科目）	2	10日	（B）
保育実習Ⅲ（選択必修科目）	2	10日	（C）

（A）……保育所及び乳児院、母子生活支援施設、児童養護施設、知的障害児施設、知的障害児通園施設、自閉症児施設、盲ろうあ児施設、難聴幼児通園施設、肢体不自由児施設、肢体不自由児通園施設、肢体不自由児療護施設、重症心身障害児施設、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設、知的障害者更生施設、知的障害者授産施設、知的障害者小規模通所授産施設、児童相談所一時保護施設又は独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園

（B）……保育所

（C）……児童厚生施設又は知的障害児通園施設その他社会福祉関係諸法令の規定に基づき設置されている施設であって保育実習を行う施設として適当と認められるもの（保育所は除く）

＊１　保育実習Ⅰ（必修科目）４単位の履修方法は、保育所における実習２単位及び、（A）に掲げる保育所以外の施設における実習２単位とする。

2010年（平成22年）厚生労働省通知「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」（雇児発0722第５号）より抜粋。児童厚生施設としての児童館は、保育実習Ⅲ（選択必修科目）の実習施設として掲げられている。

4）前掲1）pp. 112-113

5）田爪宏二・冨田久枝　2010　児童館における子どもの健全育成・発達支援の機能に関する検討　全国保育士養成協議会第49回大会研究発表論文集　pp. 154-155

本稿では、このような児童館の社会的役割と機能を踏まえつつ、保育士養成校に在籍する学生が児童館での実習を通して得た学びを確認し、保育専門職の養成に係る児童館実習の意義を考察することを目的とする。特に、保育士養成課程における保育実習の段階を踏まえて、保育実習Ⅲの対象施設としての位置づけから、学生の学びをみていきたい。

Ⅱ．保育士養成課程における児童館実習の位置づけ

1．保育士養成課程における保育実習Ⅲの歴史的変遷と児童館の社会的役割

保育士養成における保育実習の歴史を顧みると、児童館が保育実習の対象施設となったのは、1970年（昭和45年）の厚生省児童家庭局長通知「『保母養成所における保育実習の実施基準等について』の一部改正について」（児発第567号）によるものであった。この局長通知の改正の要点として、佐藤（2008）[6]は、以下のようにまとめている。

①保育実習Ⅰを保育所における実習２単位、収容施設における実習２単位とした。

②幼稚園教諭の養成も併せ行っている保母養成所における「教育実習４単位の履修をもって保育所における保育実習４単位を履修したものと認定する措置」が廃止された。このことよりこの措置を利用していた養成校にとっては教育課程に実質的に保育実習４単位が新たに加えられることとなった。

③保育実習Ⅰにおける収容施設実習の対象施設として、重症心身障害児施設が、また保育実習Ⅲの対象施設として精神薄弱児通園施設及び児童厚生施設が新たに加えられた。

④収容施設実習の対象施設を養護施設を含めて３以上の収容施設に拡大し、養護施設、身体障害児療育施設、精神障害児関係施設からそれぞれ１種以上を選択することが望ましいとされた。

この改正の背景には、「高度経済成長にともなう労働人口の流動化や核家族化・地域環境の変化、女性の社会進出など、社会の動きを受けての保育需要にこたえる必要性が生じはじめており、とくに、保育運動の高まりを反映して、保育所などの増設が進みつつあり、保母の不足が予想されること、（中略）保母の量的確保だけでなく、質的な資質の向上が期待されていることなど」があった[7]。

保育実習の対象施設となった児童館のこの時期における実態はどうであったか。児童館においても、1960年代半ば頃からその数が増加し、1975年には全国児童館連合会が設立され、児童館の活動を推進する組織面での整備がなされている。児童館の増設が活発化したこの時期は、子どもを取り巻く環境に大きな変化が生じた時代である。児童館は、児童の要保護観点に留まらず、すべての児童を対象とする健全育成を理念としており、戦後制定された児童福祉法において重要な位置を占めている[8]が、高度経済成長施策の下での都市化、工業化に伴う子どもの安全な遊び場の不足、交通事故の多発、受験競争の激化、テレビの普及などによる生活の変化、仲間集団の減少や人間関係の希薄化などを背景として、児童館の役割としての「子どもの健全育成」へのさらなる期待が求められた時代であったといえよう。

保育士養成における保育実習の実施基準は、この1970年の局長通知により、現在の保育実習にかなり近い形態となった[9]。社会環境の変化に伴い、保育需要と保育の専門家の質的向上が求められる中で、児童館が保育実習の対象施設として加わったことは意義深いことであり、保育士養成の視点からも児童館の社会的役割が理解できる。

2．Ｓ短期大学における児童館実習の位置づけ

Ｓ短期大学保育科では、保育士養成課程に体系化されている保育実習Ⅲ（選択必修科目）を児童館で実施している。実施時期は、２年次の夏季休暇中の10日間である。

Ｓ短期大学の教育課程では、１年次の秋学期に「保育実習Ⅰ-Ｂ」として10日間の施設実習（保育所以外の児童福祉施設における実習）、２年次の春学期に「保育実習Ⅰ-Ａ」として10日間の保育所実習、および「保育実習Ⅱ」として10日間の保育所実習が必修科目として位置づけられている（図１）。つま

6）佐藤信雄　2008　保育制度と保育者養成課程の変遷について　保育者養成課程における『心理学』の役割を中心にⅡ　北海道文教大学研究紀要第32号　pp. 57-71
7）前掲1）p. 15
8）財団法人児童健全育成推進財団編集・発行　2007　児童館　理論と実践　p. 20
9）前掲1）p. 19

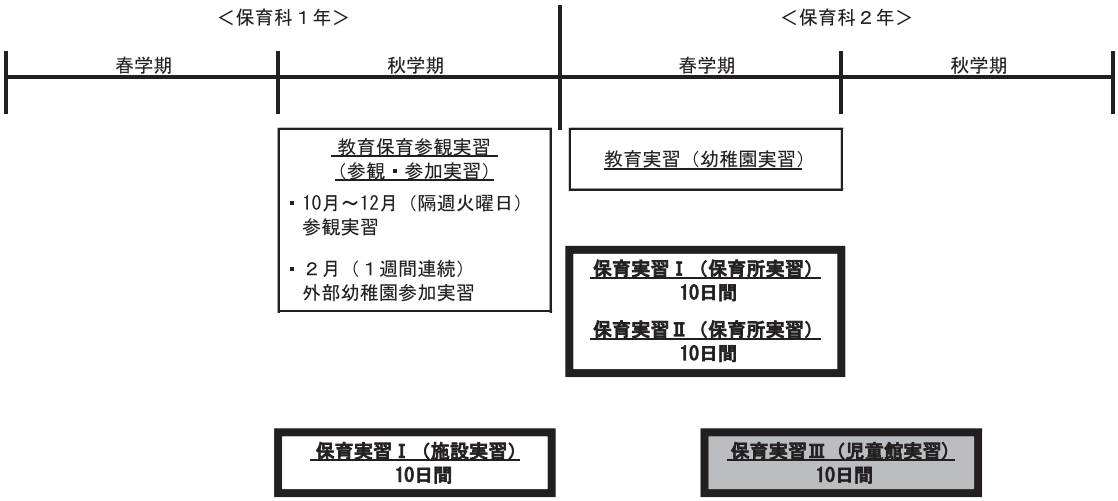

図１．Ｓ短期大学における保育者養成実習カリキュラム

り、保育士資格を取得する学生は、施設実習10日間、保育所実習20日間を実施すると、実習の必修単位が満たされるというカリキュラム構成になっており、選択科目としての保育実習Ⅲ（児童館実習10日間）は、保育士資格をベースとしてカリキュラム化された児童厚生員の資格取得を希望する学生が履修することになっている。

Ⅲ．研究方法

2010年度に保育実習Ⅲ（児童館実習）を実施したＳ短期大学保育科２年生54名を対象に質問紙を実施した。

児童館実習の期間は、2010年８月23日～９月11日の内の10日間、児童館実習の実習先は、32施設であった。質問紙実施時期は、児童館実習終了後、大学で事後指導を行った2010年９月27日、質問紙の有効回答数は53名であった。

質問紙の内容は、児童館の概要（学童保育の有無、利用者の年齢等）、実習の満足度、実習の自己評価、自由記述等によるものであった。

Ⅳ．結果と考察

１．児童館実習における満足度

児童館実習における学生の満足度を把握するために、実習を総合的に振り返って自己評価する項目を質問紙に設けた。①今回の実習は楽しかったか、②今回の実習は勉強になったか、について５件法で尋ねたところ、有効回答53名のうち、①については、「大変楽しかった」52.8％（28名）、「楽しかった」37.7％（20名）②については、「大変勉強になった」66.0％（35名）、「勉強になった」26.4％（14名）という結果となり、90％以上の学生が児童館実習に対して満足を得ていた。（表2-1、2-2）

２．実習中に関わった対象者について

児童館では、地域のニーズにあわせて様々な活動が展開されており、児童館実習の特性として、実習生が関わる施設利用者が非常に幅広いということがあげられる。先に述べたように、児童館の社会的役割は３つの機能を有しており、①遊びを通した子どもの育成、②子育て家庭の支援、③地域福祉促進の

表２－１．児童館実習における満足度（１）

「今回の実習は楽しかったか」	人	（%）
大変楽しかった	28	(52.8)
楽しかった	20	(37.7)
どちらでもない	0	(0.0)
少しいやだった	0	(0.0)
大変いやだった	0	(0.0)
無回答	5	(9.4)
計	53	(100.0)

表２－２．児童館実習における満足度（２）

「今回の実習は勉強になったか」	人	%
大変勉強になった	35	(66.0)
勉強になった	14	(26.4)
どちらでもない	0	(0.0)
あまり勉強にならなかった	0	(0.0)
全く勉強にならなかった	0	(0.0)
無回答	4	(7.5)
計	53	(100.0)

諸活動（地域における子育ての環境づくり）をとおして、児童館に来館する利用者は多岐にわたっている。

子育て家庭支援としての親子事業では、親子が一緒に活動する中で親子の関係づくり、親子の仲間づくりを進めていくことを目的としており、在宅育児家庭の支援を中心として、０歳児から就学前の児童とその母親が利用することになる。就労等により昼間留守家庭の支援としての放課後児童クラブ（学童保育）では、主に小学校１年生～３年生の児童の生活の場となる。また、児童館は、地域の全ての子どもが利用できる施設として開放されていることから、小学生から中学生、高校生までが利用するとともに、ボランティアの受け入れや子育てサークルのリーダの養成なども行われており、地域のボランティア・地域住民が参加する機会もある。

このような児童館の特性を踏まえて、児童館の利用者を、「乳児（０～２歳児）」「幼児（３～５歳児）」「小学低学年（１～３年）」「小学高学年（４～６年）」「中学生」「高校生」「保護者」に分類し、学生が実習中に関わった経験の有無をまとめた。（表３）

乳幼児のみならず、小学生児童、特に１年生～３年生までの低学年児童との関わりは、98％（52名）の学生が経験していた。また、保護者と関わった経験を得たことが保育実習Ⅰ、保育実習Ⅱではなかった特徴であり、77％（41名）の学生が、保護者と何らかの形で関わり、コミュニケーションをとる機会があった、と回答した。特に、児童館の活動の一つである乳幼児を対象とした親子事業は、学生にとって新鮮な学びの場となっていることが考えられる。

表３．実習生の施設利用者との関わり（経験の有無）

	有(％)	無(％)	計(名)
乳児（０～２歳児）	46(87)	7(13)	53
幼児（３～５歳児）	45(85)	8(15)	53
小学低学年（１～３年）	52(98)	1(2)	53
小学高学年（４～６年）	42(79)	11(21)	53
中学生	32(60)	21(40)	53
高校生	7(13)	46(87)	53
保護者	41(77)	12(23)	53

児童館実習で関わった利用者から得た学びとして、

(1) 子どもとの関わりから学んだこと

(2) 保護者との関わりから学んだこと

の２つに分類し、自由記述をまとめた。

３．児童館実習で関わった利用者から得た学び

(1) 子どもとの関わりから学んだこと

子どもとの関わりから学んだことを表４にまとめた。児童館は、地域の全ての子どもがいつでも好きな時に利用できる場である。そういった特性の中で、「乳幼児のみならず学童期児童との関わりの楽しさや大変さを知った。」「幅広い年齢の子どもと関わることで言葉かけなど臨機応変な対応の方法を学ぶことができた。」といった内容がみられた。

一方で児童館実習特有の難しさも感じており、「幼稚園実習や保育所実習と違って、来館する子どもの年齢や人数がその日にならないと確定せず、設定保育を考えることにとても悩んだ。」という記述も見られたが、そのことにより、様々な遊びの案を考え、当日にすぐに対応できるよう考えておくことの必要性や、設定保育の内容をその年齢にあうように変更する臨機応変な実践力について学んだことが伺えた。

また、利用者の年齢が幅広く、接する利用者によってコミュニケーションの方法を変えていかなければならないことから、場に応じたコミュニケーション力が求められ、その方法を模索したことも読

表４．子どもとの関わりから学んだこと

乳幼児のみならず学童期児童との関わりの楽しさや大変さを知った。
幅広い年齢の子どもと関わることで言葉かけなど臨機応変な対応の方法を学ぶことができた。
幼稚園実習や保育所実習と違って、来館する子どもの年齢や人数がその日にならないと確定せず、不明なので、設定保育を考えることにとても悩んだ。
様々な遊びの案を考え、当日にすぐに対応できるよう考えておくことの必要性や、設定保育の内容をその年齢にあうように変更する臨機応変な実践力を学んだ。
小学生においても自分が知っている友達だけではなく、知らない子どもとも交流をしていて社会性や協調性を学んでいくのだと感じた。
中学生が小学生・幼児を引っ張って遊びを展開している場面から、現代社会における異年齢交流の必要性を学んだ。

み取れた。

子どもの視点にたって感じたことは、「小学生においても自分が知っている友達だけではなく、知らない子どもとも交流をしていて社会性や協調性を学んでいくのだと感じた。」という児童館ならではの視点で子どもの発達について学ぶ機会となっている。中学生が小学生・幼児を率先して遊びを展開している場面からは、現代社会において必要とされる異年齢交流の必要性について具体的に学ぶことができており、幼稚園、保育所では経験できない児童館実習における学びの一つとなっていることが伺えた。

(2) 保護者との関わりから学んだこと

自由記述の内容から、①保護者とのコミュニケーションのとり方（表5-1)、②保護者の内面理解（表5-2）の２つに分けて学生の学びを整理した。

①保護者とのコミュニケーションのとり方

「これまでの実習では子どもの援助中心であったが、普段話す機会のないお母さんと話せたことが良い経験になった。」「子どもと接することしか経験したことがなかったので、保護者の方と接するのはとても難しく、どのように会話をすればよいのかわからなかった。」「積極的に関わると、思っていたよりも普通にコミュニケーションをとることができ、堅苦しく構えすぎないようにしなければならないと思った。」といった記述がみられた。

近年、社会的関心事にもなっている保護者対応の難しさが、学生の先入観となって意識化されているのか、「保護者は怖い存在でどう関わってよいか迷う場面があったが、子どものことをきっかけとして保護者に話しかけていくなど指導されたことを実践してみた。」といった記述もみられた。「月齢を質問したり、子どもが気に入って遊んでいる玩具を話題として声をかけると、快く答えてくださり、様々な会話ができた。積極的に関わっていくことの大切さを学んだ。」という記述からは、親への関わりは難しいことであったと思われるが、積極的に子どもを通して触れ合うことが大切であり、このことへの気づきは、今後の保護者対応に確かな実践経験として役立つのではないかと思われる。

②保護者の内面理解について

「子どもの発達や言葉、食べ物など、保護者が不安を抱く要素を知ることができ、保育者になったとき実習で感じたことを忘れず生かしていきたいと思った。」「保護者から直接、悩みを聞くのが初めてだったので、子どもが遊んでいるつもりでの行動が毎日続くと、保護者を悩ますことになるのだと感じた。」「子育ての大変さを知ることができた一方で、子どもへの愛情はとても大きなものだということ

表５－１．保護者との関わりから学んだこと（コミュニケーションのとり方）

普段話す機会のないお母さんと話せたことが良い経験になった。
子どもと接することしか経験したことがなかったので、保護者の方と接するのはとても難しく、どのように会話をすればよいのかわからなかった。
積極的に関わってみると思っていたよりも普通にコミュニケーションをとることができ、堅苦しく構えすぎないようにしなければならないと思った。
保護者は怖い存在でどう関わってよいか迷う場面があったが、子どものことをきっかけとして保護者に話しかけていくなど指導されたことを実践してみた。
月齢を質問したり、子どもが気に入って遊んでいる玩具を話題として声をかけると快く答えてくださり、様々な会話ができた。積極的に関わっていくことの大切さを学んだ。

表５－２．保護者との関わりから学んだこと（内面理解）

子どもの発達や言葉、食べ物など、保護者が不安を抱く要素を知ることができ、保育者になったとき実習で感じたことを忘れず生かしていきたいと思った。
子どもの家での様子、子育てをしていての悩みなどを聞いて、保護者から直接悩みを聞くのが初めてだったので、子どもが遊んでいるつもりでの行動が毎日続くと保護者を悩ますことになるのだと感じた。
子育ての大変さを知ることができた。しかし、子どもへの愛情はとても大きなものだとどの保護者からも感じた。
保護者の方は、話を聴いてほしい、子どもの成長を一緒に喜んでほしい、声をかけてほしい、親同士のコミュニケーションを見守ってほしいのだと思った。
児童館という場所が、保護者にとって必要な場所なのだと理解することができた。保護者の中には、孤独を感じている方も少なくないということもわかった。

を、どの保護者からも感じた。」「保護者は、話を聴いてほしい、子どもの成長を一緒に喜んでほしい、声をかけてほしい、親同士のコミュニケーションを見守ってほしいのだと思った。」「児童館という場所が、保護者にとって必要な場所なのだと理解することができた。」といったように保護者の気持ちを読み取ることをとおして、保育の専門家としての子育て支援の役割について学ぶ機会となっている。

さらに、「親子遊び」のプログラムをとおして、子どもと親の相互作用を図りながら支援をしていくという保育士の専門性について学ぶことができたことは、児童館実習の特性と言える。2011年度の児童館実習の事前指導では、「児童館実習で活かせる遊び」という内容で、学生が二人一組で親と子の役割となり、親子遊びを実践する実技系の授業プログラムを取り入れた。このプログラムが児童館実習において得た成果については、今後の検討を必要とするが、これまでの幼稚園実習、保育所実習では経験しなかった親子を対象とした保育実践の学びは、これから子育て支援に関わる保育の専門家としての意識を高める貴重な機会となっていると考えられる。

4．放課後児童クラブ（学童保育）から得た学び

放課後児童クラブにおいて、学童保育に関わった学生は22名（41.5%）であった。経験した学生数が半数に満たなかったのは、学童保育を実施していない児童館があったことが要因である。学童保育は、地域の特性に応じて独自の取り組みが行われており、学校施設で実施しているところも少なくない。

本研究においては、実習を実施した32施設のうち、学童保育を実施している児童館は13施設（40.6%）であった。実習が８月～９月にかけて実施されるため、学童保育を経験した学生は、８月の夏休みの時期と、９月の始業の時期における子どもたちの様子を見ることができる。放課後児童クラブ（学童保育）から得た学びを表６にまとめた。

自由記述からは、「夏休みと学校が始まってからの平日では、子どもの姿が違う。夏休み以上に膝にのったり抱っこやおんぶを頼んできたりと甘える姿が見られた。子どもの内面に寄り添い援助することの大切さを学んだ。」といった記述や、「小学生なので、子ども同士のやり取りを大事にしつつ、時には大人が仲立ちをしないといけない場面での関わりの難しさを感じた。」「『ただいま』と言って児童館にやってくる子どもたちのケアなど、幼稚園・保育所とは違う形での生活面での援助のあり方について学んだ。」といったように、放課後児童の生活の支援について、また遊びの拠点と居場所となっている児童館の役割について学んだことが読み取れた。近年課題となっている全国の学童保育数の増加、保幼小連携の重要性等、保育士資格を取得する者にとって保育士養成校の在学中に学童保育について理解することは意義あることだといえる。

Ⅴ．まとめ

自由記述により得られた学びを整理し、児童館実習を実施したことにより気付くことができた「保育専門職としての意識」として、①保護者支援・子育て家庭支援としての役割、②地域社会との連携の意義、③保育実践力の必要性、の３点をあげる。

①保護者支援・子育て家庭支援については、児童館実習を通して、就労家庭、在宅育児家庭ともに、全ての家庭の子育て支援に関わる専門家としての意識を高めることができると考える。放課後児童クラブ（学童保育）の活動からは、就労家庭における子育て支援について学び、平日の親子事業等の活動からは、在宅育児家庭における子育て支援について学ぶことができる。特に、保育実習Ⅰ、保育実習Ⅱに

表６．放課後児童クラブ（学童保育）から学んだこと

●学童保育に関わった実習生：22名（41.5%）
●学童保育を実施していた児童館数：13施設（40.6%）

夏休みと学校が始まってからの平日では、子どもの姿が違った。
夏休み以上に膝にのったり、抱っこやおんぶを求めてきたりと甘える姿が見られた。子どもの内面に寄り添い援助することの大切さを学んだ。
小学生なので子ども同士のやり取りを大事にしつつ、時には大人が仲立ちをしないといけない場面での関わりの難しさを感じた。
「ただいま」と言って児童館にやってくる子どもたちのケアなど、幼稚園・保育所とは違う形での生活面での援助のあり方について学んだ。
学校などとは違う遊びの中での子どもの本来の姿を見ることができた。

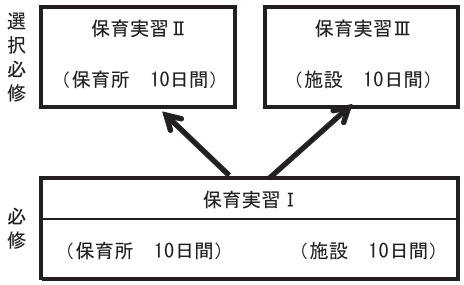

図２－１．保育士養成校における一般的な保育実習の段階

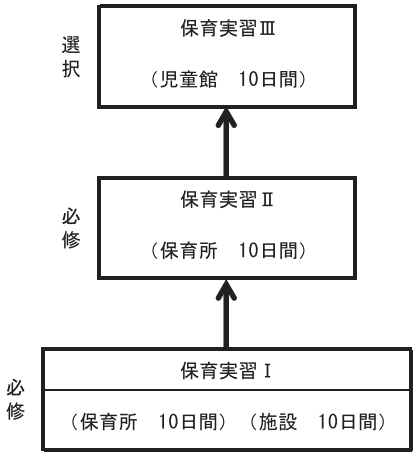

図２－２．Ｓ短期大学における保育実習の段階

おいて経験することのなかった保護者との直接的な関わりをとおして、コミュニケーションの方法を具体的に学ぶ機会を得たことは大きい。

②地域社会との連携については、児童館のプログラムや日々の子どもの遊びに際して、地域の人々やボランティアが協働で取り組む姿をみることができ、多くの人々の協力があって子どもの健全育成が可能になるのだということを実践経験から学ぶことができたといえる。

③保育実践力については、幼稚園実習や保育所実習と異なり、来館する子どもの年齢や人数が確定せず、設定保育における指導案を立てる難しさを経験したとともに、当日の子どもの様子を即座に把握し対応できるよう計画をたてることや、設定保育の内容をその日来館した子どもの年齢に適したものと変更することの必要性について学び、場に応じた臨機応変な実践力を積み重ねることができたといえる。

保育士養成課程においては、保育実習実施基準に基づき、図2-1のように、必修科目の保育実習Ⅰをベースとして、選択必修科目の保育実習Ⅱ、保育実習Ⅲを分散して実施することが一般的である。一方、Ｓ短期大学においては、保育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを図2-2のように段階を踏んで実施している。

保育実習Ⅲ（児童館実習）が保育士養成課程の最後の実習として位置付けられていることの意義は極めて大きく、児童館実習をとおして、子どもの発達と健全育成のあり方や地域における子育て支援について学ぶことができ、保育の専門家としての視野を広げることができていると考える。また、これまでの実習では、特に実習記録を作成することの難しさから学生の負担感も大きかったが、いくつかの実習を経験し、そこで培われた実習記録を書く力が最後の実習には有効的に働き、時間的、体力的にもゆとりをもって実習に取り組むことができた、という感想が多くの学生から得られた。また、実習中の生活について、健康状態や睡眠時間等を尋ねたところ、殆どの学生が普段の調子を維持し、睡眠時間についても十分とることができた、と回答した。先に述べた実習の満足度においても、実習を経験した学生のうち90.5％が「実習は楽しかった」、92.4％が「実習は勉強になった」と回答しており、心身ともに充実した状態で実習に取り組むことができたことが伺える。このことは、児童館実習が保育者となるための意欲を高め、自信を得る貴重な機会となっていることを示すものと考えられる。

本稿では、自由記述を中心に、実習での学びをまとめたが、保育実習Ⅰ、保育実習Ⅱのデータと比較することにより、今後は、保育実習Ⅲの学びを統計的に見ていく必要がある。さらには、児童館の社会的役割や機能についても研究を深め、時代に即した保育専門職の養成に係る実習のあり方を考えていきたい。

引用・参考文献

森知子　2011　保育専門職としての意識を高める児童館実習での学び　日本保育学会第64回大会発表要旨集 p.69

小木美代子・立柳聡 他　2005　子育ち支援の創造―アクション・リサーチの実践を目指して　学文社

佐藤信雄　2008　保育制度と保育者養成課程の変遷について　保育者養成課程における『心理学』の役割を中心にⅡ　北海道文教大学研究紀要第32号　pp. 57-71

田爪宏二・冨田久枝　2010　児童館における子どもの健全育成・発達支援の機能に関する検討　全国保育士養成協議会第49回大会研究発表論文集　pp. 154-155
財団法人児童健全育成推進財団編集・発行　2007　児童館　理論と実践
全国保育士養成協議会編　2007　保育実習指導のミニマムスタンダード―現場と養成校が協働して保育士を育てる―　北大路書房